

虎関師錬の賦をめぐって

小 嶋 明 紀 子

はじめに

中国文学の豊饒をもたらした一因として、文体の多様さが挙げられる。「文体」という語は多義的であるけれども、ここでは、中国における伝統的な分類である「詩」「賦」「銘」「論」といった文体名を指す。各文体の傑作は『文選』等のアンソロジーに収録され、各文体の特徴は『文心雕龍』を初めとする文学理論の書において分析されてきた。文体論は、声律論などと並んで中国の文学理論の中核の一つとなっている。

ところで、日本人には、中国の文体の問題はどのように受けとめられたのであろうか。日本人の漢文文体に対する関心は、たとえば平安時代の藤原明衡撰『本朝文粹』に、賦・対冊・銘・記などの文体が収録されていることから窺うことができるけれども、外国人である日本人にとって多様な文体を書き分けるためには相当な力量が必要であることは贅言を要すまい。

「賦」という文体は、『文選』の巻頭に置かれることから分かるように、中国では、「詩」と並ぶ重要な文体である。『本

朝文粹』も『文選』に倣って賦作品を巻頭に置いている。日本人の「賦」実作の概況については、川口久雄が平安時代の紀長谷雄の賦について論じた次の部分が参考になる。⁽²⁾

賦は本来しらべを重視し、華麗な対偶的表現に富み、ものづくしを織りこんだりして修辞過剰、様式偏重のきらいのあるジャンルであつて、「何を」のべようかという精神内容が軽んぜられる傾向にあるが、わが国の賦ではことにこの傾斜が甚だしいように思う。したがつて内容として展開する思想は貧弱であり、ついに文学的な燃焼に高まらないままに衰弱したように思われる。(中略)(賦はその後衰滅してしまつが、江戸期の俳諧文学において、漢文学の賦のパロディとして俳文の賦が新しいジャンルとして生れる。この変容された国語による俳諧の賦においてかえつて文学的な生命をえて復活再生したように思う。)

川口の指摘によれば、中国の賦は日本漢文に多大な影響を与え、賦の属性である対偶的表現やものづくしの性格。これは鈴木虎雄が言うところの「舖陳」に相当しよう。は日本漢文のみならず和文の文学にまで広く影響を与えたものの、日本人にとつて、賦の実作には相当の困難が伴つていたことになる。

ところで、日本漢文学の最高峰の一つである五山文学の文学僧の中に「賦」という文体の実作を試みた作家の一人に虎関師錬がいる。⁽³⁾ 虎関師錬は、五山僧の中でも傑出した学問僧の一人であり、中国の文学理論の受容や音韻研究についても日本漢文学史上欠かすことのできない重要人物である。蔭木英雄は虎関について次のように言つた。⁽⁴⁾

中世の我が禅林を見渡す時、虎関以前にすぐれた詩文をもした禅僧は多いが、それらの多くは宋元の大陸の禅林文学の延長のようなもので、これに大きな転換をもたらしたのは、外ならぬこの虎関師錬であつた。何となれば、彼は後述の如き強い文学批評精神を有し、その論は日本文学の中世的性格を具備しているからである。

その虎関の別集『濟北集』巻一の冒頭には、六篇の賦が見られる。『濟北集』所収の順に挙げれば、「盆石賦」「百蕊菊賦」「緑蔭亭賦」「丈室焚香坐賦」「説老賦」「文竹管賦並序」である。

虎関の賦の傾向を概観するためには、北村澤吉の指摘が参考になる。北村は『五山文学史稿』⁽⁹⁾一四〇～一五四頁において、賦を含めた虎関の文について論じ、「盆石賦」「説老賦」⁽¹⁰⁾を挙げたあとに次のように述べる。

縦横奇恣を写すは韓子の送窮文を扮本とせるか、易々弁じ去るは其の進学解に似たり。巧妙の作と云ふべし。以上抄出せる外、賦の見るべきもの少なからず。其の百蕊菊賦の如きは清秀古雅にて誦すべし。文竹管賦の如きは構想精醇愛すべし。唯牽強理に入らしめんとするは禅徒の弊也。

虎関の賦は、賦の伝統的スタイルである「序」「本文」「乱」と呼ばれる三部構成をとるものが多く、賦としての体裁を備えた作品となっている。『済北集』は、賦のほか、表、祭文、論などの文体の作品が収録され、虎関の文体への関心の強さを示している。

本稿は、虎関の六篇の賦の内容読解を試み、その内容・形式の特徴を論じ、虎関の賦の傾向を分析することを目的とする。以下、『済北集』所収の順に、虎関の六篇の賦を取り上げ、それぞれの内容と特色について論じてみたい。⁽¹¹⁾

一、「盆石賦」

まず、「盆石賦」を見てみたい。盆石観賞をきっかけに融通無碍の境地にいたることを説く内容である。⁽¹²⁾この作品は、賦の一変形である「設論」と呼ばれる文体の流れを引くもので、北村がやはり「設論」の文体の流れを引く唐の韓愈の「進学解」との類似性を指摘していることは正鵠を射ている。「設論」の文体は「客」と問答し、「客」を論破することにより、作者の論理の正しさを明らかにする筋立てを持つ。「盆石賦」も問答を通じて、世間の常識の枠内にとどまる「客」を降参させる筋立てとなっている。内容は大きく三分することができる。第一の部分では盆石の愛好とその理由を述べ、第二の部分では盆石愛好を嘲笑する「客」に向かい盆石愛好の意義を説き、第三の部分では「客」を戒める。いま、第二の部分を見る。

客見笑而言、清則清矣。争奈其髡何。

応之曰、子視培塿而不知巨岳焉。

夫盆石之玩也、仮于山水矣。

水其根坻者、状于波流也。蒲其岩隈者、肖于草木也。

或瘤松与瘿梅、或奇葩之怪併。

寅刷昏灑之苟遲時也、枯瘁萎病之煩看育矣。

廢功毀業之不遑、擲寸陰於尺璧。

然失佳致之大山、取小境於阜垤。

客見て笑いて言わく、清きは則ち清し。其の髡なるを争^い奈^か何^んせん。

之に応えて曰わく、子は培塿を視て巨岳を知らず。

夫れ盆石の玩や、山水に仮る。

水の其の根坻にあるは、波流に状る。蒲の其の岩隈にあるは、草木に肖る。

或いは瘤松と瘿梅とあり。或いは奇葩怪併あり。

寅に刷し昏に灑ぐも苟^もし時に遅るれば、枯瘁萎病 看育に煩う。

功を廢し業を毀つに違あらず、寸陰を尺璧に擲つ。

然れども佳致の大山を失し、小境を阜垤に取る。

「客」は虎関の盆石愛好を嘲笑し、「髡なるを争奈何せん」と言つ。これは本物の植物が繁茂していない盆石を愛好することに対する嘲弄である。「髡」の語を、僧侶が禿髪であることにも引っかけていると見るのは穿ちすぎであらうか。虎関は、「客」の好む実物の山水は小土丘に過ぎず、自分の好む盆石こそむしる巨岳の姿に似通つものであると反論する。「或瘤松」から「阜垵」までの部分は、実物大の植物は手入れが煩わしいことを述べるもので、盆石の觀賞が本物の植物の觀賞に勝るとする命題を立証するための布石である。

続く、盆石の形状を詠ずる部分はこの賦の最大の見どころである。

今此石之高数寸、盆之広盈尺。

海嶠之形状不乏。

碧峰入雲而鬢束者有之。青屏涵水而壁立者有之。

岩洞若剜而可隱神仙者有之。磯崎平延而可釣魚鼈者有之。

径路狭窄而纒樵蘇之可通者有之。湫池互陰而似龍蛇之可蟄者有之。

我避培塿之雜穢、省看養之苦役。

玩此具体之微、又不宜乎。

子之嫌髡者其阜垵乎、予之不嫌者其絶岳乎。

我又隨時拈一枝花、或植峰者或插壑者。

卉木之更繼、朝開而暮落。

四序之艷景、千变而万易。

因此而言、不必髡、又非不髡矣。

今此の石の高きこと数寸、盆の広きこと尺に盈つ。

海嶠の形状乏しからず。

碧峰雲に入りて鬢束する者之有り。青屏水に涵^{ひた}して壁立するもの者之有り。

岩洞^{けす}剜^うるが若くして而して神仙を隠すべき者之有り。

磯崎平延にして而つて魚鼈を釣るべき者之有り。

径路狭窄にして而して纔かに樵蘇の通すべき者之有り。

湫池^{せう}互陰にして而して龍蛇の蟄すべきに似たる者之有り。

我培塿の雜穢を避け、看養の苦役を省く。

此の具体の微を遊ぶ、又宜しからざるや。

子の髡を嫌う者は其れ阜垤か、予の嫌わざる者は其れ絶岳か。

我又た時に随いて一枝の花を拈り、或いは峰に植え或いは壑に挿す。

卉木 更^{せい}継ぎ、朝に開き暮に落つ。

四序の艷景、千変し万易す。

此に因りて言え、必ずしも髡ならず、又髡ならざるに非ず。

盆石の形状が「巨岳」の形状に通じることを説くために、盆石の形状を委曲を尽くして描写している。この部分の壮大華麗な筆致は、たとえば司馬相如「上林賦」などに見られる筆致を想起させる。盆石という小さなものから壮大なイマジネーションを広げる観念操作の楽しさが生き生きと伝わってくる。物を別の物に見立てて喜ぶ発想は稚氣溢るるものではあるけ

れども、華麗な言葉を連ねた堂々たる書き方には、読者に強く訴えかける迫力がある。また、「客」の好む山水とは実は小さな土丘に過ぎないと言い、自分の好む小さな盆石こそが「絶岳」に通じるのであると言う、物の見方の百八十度の転換は、既成観念に凝り固まった俗人に頂門の一針を与える効果がある。この物の見方の転換による既成観念からの脱却の痛快さこそこの賦の眼目である。

また、盆石に植物を挿せば、四季の景色を演出して楽しむことが出来るので、盆石が「髡」かどうかは決めようがないとも述べる。ここまで、多方向からの論理を畳みかけ、「髡」という要素に拘った「客」の見識の狭さを完全に論破している。さらに次の部分では、盆石という「小さなもの」をテーマに選んだ意義が最大限に発揮されている。

又此盆石、子為大乎、為小乎。

我吹水而鼓起四海之洪濤、瀉峰而垂下九天之飛瀑。

洗石者整頓乾坤、換水者掀翻溟渤。

是物之变而我之常也、夫物之小大未定矣。

蚊睫者蟪蛄之野也、蝸角者蛮触之国也。

赤梟者輕于許由之瓢也、蓬壺者殆于龍伯之竹也。

子以為如何也。

又た此の盆石、子大と為すや、小と為すや。

我水を吹けば四海の洪濤を鼓起し、峰に瀉げば九天の飛瀑を垂下す。

石を洗えば乾坤を整頓し、水を換つれば溟渤を掀翻す。

是れ物の変にして我の常なり、夫れ物の小大 未だ定まらず。

蚊睫は蟪蛄の野にして、蝸角は蛮触の国なり。

赤梟は許由の瓢より軽く、蓬壺は龍伯の竹よりも殆し。

子以為らく如何。

盆石の手入れは、盆石の側から見たならば、世界を動かすことなのだという発想の転換により、物の見方は、自分の気持ち一つでいかようにも変わることを説く。自分自身が「常」であることに気がつけば、物の見方を変えて楽しむ余裕が出来ることを述べるこの部分には、物の見た目に惑わされがちな俗人の耳目を一新する鋭さがある。

大きさに絶対の基準はないということの根拠を、蚊の睫も蟪蛄という虫にとつてみれば大きいこと、蝸角の上で蛮氏と触氏が争うこと、許由が天下を譲られるのを辞退し、さらに瓢さえも煩しいと捨てたこと、蓬壺（＝蓬萊）も龍伯国の巨人から見ればちつぽけなものであること、とよく知られた典故を並べて説明する。ここまでの粘り強い漸増的な叙述により、小さな盆石を觀賞する行為は観念的な意義を持つものに変えられたのである。

第三の部分は、「客」が虎関の論に降参した後の対話である。

客避席而拱言。

視茲石清我目、入茲室清我識。

乃知事非事而弘我之多、物非物而益我之博也。

予曰、子只知清子之目識、未知予之清目識、子還坐少善学乎。

客如言。然而盆不浪石不動。客無言。予亦默。

頃刻而客不辞而出。

客席を避けて拱きて言つ。

茲の石を視て我が目を清め、茲の室に入りて我が識を清む。

乃ち知る事の事に非ずして我を弘むることの多く、物の物に非ずして我に益することの博きを。

予曰く、子只だ子の目識を清むるを知るのみ、未だ予の目識を清むるを知らず、子還坐するも善く学ぶこと少なきか。

客言つが如し。然して盆浪だたず石動かず。客言無し。予亦た黙す。頃刻にして客辞せずして出づ。

「客」が虎関のお陰で「目」と「識」とを清めたと感謝するのに対し、まだ自分と同じ境地には達していないと戒め、真実を追求することの難しさを示す。先ほどまであれほど華麗に描かれていた盆石が今や「盆浪だたず石動かず」と描かれる部分は、物の見方は自分の心次第であるというテーマを読者に鮮明に印象づける効果がある。

この賦は、論理を漸増的に発展させ、相手を粘り強く説得しようとする点に見どころがある。一般に「設論」の文体の作品にはこの傾向があるけれども、後述するように、虎関は他の賦でも好んでこの粘り強く説く手法を用いている。この手法は虎関の賦の特色の一つと考えられる。

この作品の叙述法は、中国の戦国時代の問答体の賦の流れを引く「設論」の文体の影響を受け、論理性に優れる。いっぽう、盆石の美しさについて語る部分には、漢賦の影響を窺わせる壮大華麗な描写をも交えている。この作品からは、虎関が中国の歴代の賦の叙述法を吸収していることが窺える。

二、「百蕊菊賦」

続いて、「百蕊菊賦」を取り上げたい。この賦は漢から魏晋の詠物の賦・魏晋の抒情小賦の影響を強く受けた作品で、虎関の六篇の賦の中で最も抒情性の強い作品である。散文の序、「兮」字を用いた楚辞風の韻文部分、まとめの部分である。「乱」から成り、「伝統的な賦の三部構成の形式を備えている。

「菊」を詠った先行の賦作品には『文苑英華』「草木」の部立てに収める唐・楊炯「庭菊賦」(巻一四九)がある。また、花の蕊に着目して詠った先行の賦作品には同じく『文苑英華』「草木」の部立てに収める唐・蕭穎士「蓮蕊散賦」(巻一四八)がある。

序も対句を駆使した格調高い文章であるけれども、ここではその梗概のみを紹介する。鍊子(＝虎関)は、童子が持って来た百蕊菊を見て、「非常之姿」を抱きながら、富貴の家でなく粗末な住まいに生えたことを嘆く。童子はこれに対し、富貴の家に生まれて容色をほんの一時愛でられるよりも、師によって徳を詠われるほうが百蕊菊にとって幸せであると言い、百蕊菊を詠ずることを懇願する。

続く本文部分では、百蕊菊の美点を次のように讃える。句法は、助字を中間に挟み、句末に「兮」字を用いる、楚辞風の句を多用する。

商氣之蕭瑟兮、草木之變衰。

雲悠揚而放意兮、風凜嚴而砭肌。

於是乎有君子之花者。

協重九之正律兮、開過百之偉蕤。

農（典）墳言養性而為上兮、礼経志節候而不差。

階聯銀盆繡毬兮、庭堆疊羅垂糸。

欲聞玉鈴於未響兮、可慶金錢之不貲。

膩粉粘徵士之指介兮、落英綴放臣之唇皮。

商氣蕭瑟として、草木変衰す。

雲は悠揚として意を放ち、風は凜厳として肌いしほに砭つうつ。

是に於てか君子の花なる者有り。

重九の正律に協い、過百の偉蕤を開く。

農（典）墳の言に性を養うを上と為し、礼経の志候を節して差わず。

階きに銀盆繡毬を聯ね、庭に疊羅垂糸を堆くす。

玉鈴を未だ響かざるに聞かんと欲す、慶ぶべし金錢たからの貲たからとせざるを。

膩粉ねい徵士の指介ねいに粘り、落英 放臣の唇皮に綴る。

百蕊菊について、寒さが厳しくなつて初めて咲く点、儒家の經典に叶う精神性を備えた点を高く評価する。金色の美しさを持つているけれどもその「金」は金銭的価値に関わらないものであると喜ぶ部分には、外見的な美の価値があるがままに評価しつつも、それに精神的な価値を融合させようとする思想が見られる。抒情的な筆致は、たとえば西晋の潘岳「秋興賦」のような魏晋の抒情小賦に見られる筆致に似通う。

この後、菊いっぱいの美点を挙げつつも「然皆是常菊之有、而不取于茲焉」と言い、百蕊菊独自の美点を詠い始める。ま

ず先に菊いっぱんの美点を詠い尽くしておいて、その後には菊のうちの「非常者」である百蕊菊の美点を詠うという二段階の叙述法は百蕊菊の美点を読者に強く印象つける効果がある。「盆石賦」に見られた漸増的叙述法がここでも用いられているのである。

此非常者、

一蒂百蕊兮衆弁圍、浅深色兮先後披。

始黄中白而終紫兮、千態万度萃一時。

彼百葉桃千葉蓮兮、只弁多而蕊希。

多弁銜艷媚兮、多蕊盛德儀。

范史二譜不能載兮、陸蘇兩賦豈得摛。

花卉穠郁兮。

此の非常の者、

一蒂百蕊にして衆弁圍み、浅深の色 先後に披く。

始めは黄中は白終りは紫、千態万度一時に萃る。

彼の百葉の桃千葉の蓮は、只だ弁のみ多くして蕊希し。

多弁艷媚を銜い、多蕊徳儀を盛んにす。

范史の二譜載する能わず、陸蘇の兩賦豈に摛くを得んや。

花卉穠郁たり。

百蕊菊を「百葉桃」「千葉蓮」と比較して、内に蕊を隠す点を称える。蕊を人間の内面の徳に見立てたところが面白い。しかも、かりに「千葉蓮」が『楞嚴經』巻一に見える「千葉宝蓮」を指すのだとしたら、百葉菊を仏典に見えるものより高く評価していることになる。ここに、仏典に見えるもののみをかたくなに称揚するのではない、虎関の胸襟の広さが窺える。「徳」は儒家思想の重要な概念の一つである。また、儒家思想には、「文質彬彬」という語が示すように、外面の美と内面の美の両立に意義を見いだす考え方があつた。外面の美と内面の美をふんだんに備えた百蕊菊は、儒家思想の「文質彬彬」の考え方に叶うものである。いっぽう、無数のものが集まって溢れんばかりのパワーを放出する姿は、仏教の曼荼羅的な世界を彷彿とさせる。換言すれば、植物の「蕊」を詠ずる部分に、儒家思想と仏教思想が包括的に込められているのである。続いて「乱」の部分では、百蕊菊の素晴らしさを歌い上げる。

未（末）有若奇乱曰、

智者心瞻愚者匱兮、庸人氣寡貴人熾兮。

心瞻智氣熾貴兮、蕊花心香花氣兮。

百蕊心多花中智兮、百蕊香多菊中貴兮。

滄一蕊菊寿百歳兮、滄百蕊菊定万歳兮。

未（末）に若の奇乱有りて曰く、

智者心瞻ゆたかにして愚者は匱とほし、庸人氣寡くして貴人熾さかなり。

心智瞻かなり氣貴熾さかなり、蕊は花の心なり香は花の氣なり。

百蕊の心花中の智多く、百蕊の香菊中の貴多し。

一蕊菊を喰らわば寿百歳なり、百蕊菊を喰らわば定めて万歳ならん。

「奇乱」の語は意味が通じにくいけれども、「乱」(＝楚辞のまとめの部分)から虎関が作った造語と解しておく。句中対の多用により短い字数の中に深い内容を込めている。心豊かな智者、気盛んな貴人のイメージに百蕊菊をオーバーラップさせ、さらに蕊を花の心、香を花の気に見立てる発想は奇抜である。物体に観念的要素を付与して楽しむ知性と、楚辞以来の菊の高潔なイメージが相俟って、この「乱」を格調高いものになっている。

「百蕊菊賦」は、テーマについて言つと漢から魏晋の詠物賦の流れを引き、全体の格調について言つと魏晋の抒情小賦の流れを引く作品である。いっばんに詠物賦はオリジナリティを打ち出すのが難しいけれども、この賦は百蕊菊の無数の蕊とそれらが放つ香りを人間の内に隠された智や気に見立てることで、菊という物体に観念的な要素を与えている。楚辞に伝統的に詠われてきた菊の高潔なイメージを基調としつつも、百蕊に自分なりの見方を付与している点で、伝統の上に個性を開花させた意欲的な作品である。悲憤憂愁の文学である楚辞のトーンと、禅僧の知性とが不思議と調和を成している。前述した虎関の粘り強い漸増的な叙述法が、この調和を可能にする一助となっている。

三、「緑蔭亭賦」

次に「緑蔭亭賦」を見てみたい。緑蔭の避暑が自然の摂理に叶うことを詠う内容で、他の賦と同じく、物の見方の転換に面白さがある。二部構成で、議論を主体とする本文と抒情的な「歌」から成る。議論を主体とし、勢いのある文章である。

この賦は、鈴木虎雄が分類する「文賦」の系統に属するだろう。鈴木は、『賦史大要』第六篇「文賦時代」二七五―二七六

頁で「文賦」について次のように説明する。

此の「散文的氣勢の有無」は以て其の文賦たるや否やを決定する標準なりと考ふ。又、其の内容につきては、漢賦は諷諭といふことに拘泥したるも、文賦に在りては之に拘泥せず、随意に自己の主旨を立つるを妨げざるものたり。

「緑蔭亭賦」は議論を主体としながら、随意に抒情を交え、軽妙洒脱な作品に仕上がっている。この筆致は、北宋の蘇軾「前赤壁賦」に似通う。鈴木は同書二七五頁で「余は文賦の内容は議論のみならず、叙景・叙事・叙情、皆妨げなしと考ふるものなり」とも言う。「緑蔭亭賦」はまさに鈴木の言う文賦の特徴を備えた作品と言つことができる。

冒頭部分では、まず夏の暑さに苦しむことを述べる。続いて、富貴の家は夏に台を建て泉池を作つて避暑をするが、自分は数本の木の蔭の動きに合わせて丸椅子を動かし、これを「緑蔭亭」と呼んでいる、と言つ。

世豪富逢夏時、高台榭鑿泉池、而為避暑之嬉。

鍊子之竄也、水榭無資焉。

憩西三株之樹樾、扁緑蔭亭而詫詫焉。

畜数个之团凳、客来揖坐而相怡。

日之昇也凳西移、其傾也東移、其中也根移、皆適宜矣。

世の豪富 夏時に逢うや、台榭を高くし泉池を鑿ち、而して避暑の嬉しみを為す。

鍊子の竄しきや、水榭に資無し。

西三株の樹樾に憩い、緑蔭亭と扁して詫詫たり。

数个の团凳を畜え、客来たれば揖坐して相怡ぶ。

日の昇るや瓮西に移し、其れ傾くや東に移し、其れ中なるや根に移す、皆宜しきに適う。

修辞を廃した素朴な筆致で、木陰に宿る楽しさを詠う。「訖訖」は「詭訖」の意に解しておく。『孟子』告子下の「詭訖、予既已知之矣」に基づく語で、得意のさま。ただの木陰を「緑陰亭」と名づけて得意になっている自分を諧謔的に表現する語だけれども、この語にこそ虎関の自負が込められていよう。

客笑曰、此亭何不間架乎。

鍊子曰、亭之有間架也必破矣、亭之無間架也終不破矣。

夫有地者有植物焉、有植物者又有陰焉。

我之亭豈有破乎。

客笑いて曰く、此の亭何ぞ間架せざるやと。

鍊子曰く、亭間架有れば必ず破れん、亭間架無くんば終に破れず。

夫れ地有れば植物有り、植物有れば又た陰有り。

我の亭 豈に破ること有らんや。

「客」は緑陰亭に「亭」としての結構を備えないのはなぜかとかからかう。虎関は、地に植物が生え、植物に陰が生じる自然の摂理を挙げると同時に、「亭」としての結構を備えないからこそ永遠に破れずに「亭」であり続けるという、逆説的な論理で対抗する。

客曰、美哉緑蔭乎。

夫春樹多花而少葉、秋冬無葉而空枝。

唯夏木葉祁祁、造物者有意思乎。

鍊子曰、爾当熾陽之炎赫、苦乾坤之甑炊。

於是時也彼泉台之池榭、無樹蔭則涼氣微矣。

有樹蔭則無泉池而涼氣滋矣、是我亭之愈于泉池。

若又春秋之木有葉、夏天之木無葉、大地之蒼生争奈於喝渴。

是造物意思之切者也、故我之亭者取于造物矣。

造物之亭者天下之亭也、天下之亭者無破滅矣。

客曰く、美なるかな緑蔭や。

夫れ春樹は花多くして葉少なく、秋冬は葉無くして枝を空しうす。

唯だ夏木のみ葉祁祁たり、造物者意思有るか。

鍊子曰く、爾熾陽の炎赫たるに当たり、乾坤の甑炊に苦しむ。

是の時に於て彼の泉台の池榭、樹蔭無くんば則ち涼氣微かなり。

樹蔭有れば則ち泉池無くして涼氣滋し、是れ我が亭の泉池に愈れるなり。

若し又た春秋の木に葉有りて、夏天の木に葉なくんば、大地の蒼生喝渴を争奈せん。

是れ造物の意思の切なる者なり。故に我の亭は造物を取る。

造物の亭は天下の亭なり、天下の亭は破滅する無し。

緑陰の避暑は、夏に緑葉を茂らせる造物主の心に叶う行為なのであると述べる部分には、人為を排し無為を尊ぶ老莊思想と、自然の摂理があるがままに受け入れる仏教思想が包括的に述べられている。

最後に、客のために作る「歌」において、「夏之葉」の価値を次のように讃える。

因而為客歌曰、

春之葉兮压于花、秋之葉兮銜于色。

共牽兮奢儉、其中兮不得。

只夏之葉兮拯人急、故我亭兮葉正質。

因りて客の為に歌いて曰く、

春の葉や花を压し、秋の葉や色を銜う。

共に奢儉を牽くに、其の中を得ず。

只だ夏の葉のみ人の急を拯う、故に我が亭葉質を正しうす。

花の添え物となる「春之葉」や色の美しい「秋之葉」よりも、「夏葉」の「質」こそ評価に値すると述べるこの部分には、外見の美しさを誇るものに目を奪われ、内実に気付かない俗人を諭す深みがある。

四、「丈室焚香坐賦」

次に、「丈室焚香坐賦」（「丈室にて香を焚き坐するの賦」）を見てみたい。六篇の賦中、最も仏教色が強い作品で、香を聞くことで差別を乗り越えることを詠う。前半のイマジネーションの広がりを描く部分は、北宋の欧陽脩「秋声賦」「鳴蟬賦」の描写に似通う。後半の議論の整然としたさまは北宋の蘇軾「前赤壁賦」に似通う。この作品もまた鈴木虎雄の分類するところの「文賦」の系統に属しよう。

十笏室六赤牀、八卦瓷一炷香。

微烟未発、素馥先揚。

眼耳潜伏、鼻觀飛颺。

経香肆過花郷、跨真臘超占城。

不文武之均火、起清妙之奇芳。

于時我廬不覺汗穢、浄潔薰蕕宛如嚴麗之上方。

十笏の室 六赤の牀、八卦の瓷 一炷の香。

微烟未だ発せざるに、素馥先づ揚がる。

眼耳潜伏し、鼻觀飛颺す。

香肆を経花郷を過ぎ、真臘を跨ぎ占城を超ゆ。

文武ならざるの均火、清妙の奇芳起く。

時において我が廬汗穢を覚えず、浄潔の薰薷宛も嚴麗の上方の如し。

冒頭、「十笏室」「六赤牀」「八卦瓷」「一炷香」の数詞対の畳みかけは巧みである。視覚と聴覚を閉じ、嗅覚のみの世界に没頭すると、香によって無限のイマジネーションの世界が広がる。身体器官の感覚を可能な限り閉ざすことで真理に近づこうとする趣向はいかにも禅僧らしい。

劈絮漸上、亭亭余尺。

末梢微揺、寸屈分曲。

散乱糸、敷輕穀。

雲淡汚、烟青碧。

冲仙靈、翔鸞鶴。

于時我廬不見障屏、高宏寬博乃似太虚之寥廓。

若夫浄吾室者香氣之芬烈也、博吾室者香烟之翳鬱也。

芬潔而言之茲室衆香国也、寬広而言之茲室華蔵刹也。

衆香而可送香飯於毘耶、華蔵而灑甘露於摩竭。

劈絮漸く上り、亭亭として尺に余る。

末梢微揺して、寸に屈し分に曲る。

乱糸を散じ、輕穀を敷く。

雲は淡泞たり、烟は青碧たり。

仙靈を冲らせ、鸞鶴を翔らしむ。

時において我が廬障屏を見ず、高宏寛博なること乃ち太虚の寥廓たるに似たり。

若し夫れ吾が室を浄むる者は香氣の芬烈なり、吾が室を博むる者は香烟の蒨鬱なり。

芬潔なること之を言わば茲の室衆香国なり、寛広なること之を言わば茲の室華蔵の刹なり。

衆香は香飯を毘耶に送るべく、華蔵は甘露を摩竭に灑ぐべし。

この部分では、香煙が立ち上ることイマジネーションが広がり、狭く汚い部屋が広く清潔に感じられ、ついには衆香国や華蔵の刹といった仏教的トポスにすら感じられると言つ。香煙を具体的な形状のある事物に喩えてイメージを広げる手法は「盆石賦」に共通する。

嗚呼汗室為衆香之国者、穢而浄也矣。

隘室為華蔵之刹者、狭而広也矣。

我不離坐而神游二刹者、静而動也矣。

始吾廬也非不狹汗焉、吾坐也非不閑静焉。

今吾室也非不浄広焉、吾坐也非不游動焉。

因此而言穢未必不浄矣、狹未必不広矣、静未必不動矣。

是曰妙香之三昧、託於古詩之一派。

嗚呼汗室衆香の国と為るは、穢にして浄なるかな。

隘室華蔵の刹と為るは、狭にして広なるかな。

我坐を離れず一刹に神游するは、静にして動なるかな。

始め吾が廬や狭汗ならざるに非ず、吾坐するや閑静ならざるに非ず。

今吾が室や浄広ならざるに非ず、吾坐するや游動せざるに非ず。

此に因りて言えば穢は未だ必ずしも不浄ならず。狭は未だ必ずしも不広ならず。静は未だ必ずしも不動ならず。

是れ妙香の三昧と曰い、古詩の一派に託す。

汚い部屋が衆香国に感じられ、狭い部屋が華蔵の刹に感じられ、座ったままで動いたように感じられる。「穢」と「浄」、
「狭」と「広」、「静」と「動」という差別を乗り越えようとする考え方は、仏教思想のみならず『莊子』の「斉一」の思想
にも通ずる。しかし、虎関は「浄」「広」「動」の概念そのものが無意味だと言っているのではない。それらの概念は、現世
にあるがままのものとして認めるけれども、自分の心の持ちようで差別が乗り越えられることを説くことに眼目がある。こ
の作品は仏教思想をパラフレーズしたものはあるけれども、文学作品としての面白さは、華麗なイマジネーションの広が
りと、議論の勢いの良さにある。文学作品が、読者を仏教の真理に導く橋渡しの役割を持って作られたとしても、そこへ到
る道行きのほうが面白くなってしまった一例であろう。

以上、「文室焚香坐賦」は、仏教思想をパラフレーズして、文学作品としての面白さを開花させた作品である。

五、「説老賦」

「説老賦」は、老いを嘆く老人「故旧の一叟」に向かつて老いの長所を説く内容の賦である。梗概は、故旧の一叟がまず自分の迷いを述べ、それを主人が喝破するというもので、漢の東方朔「非有先生論」に似通う。前半の諧謔的な詠いぶりは、戦国時代の宋玉「登徒子好色賦」に似通い、後半の修辭と思索が融合した筆致は、東晋の孫綽「遊天台山賦」に似通う。また、最後に「故旧の一叟」が虎関の説得に感服して「作」る部分は、楚辞の「漁父」の最後に漁父が詠う「歌」の、抒情と思索が融合したトーンに似通う。

故旧之一叟、通謁而來前。

眉縞皚不界髮、頭駑脆低於肩。

下榻而相揖、薦坐而指筵。

趺居之未定、吐氣而敷言。

離索之不必遯、風馬牛可及焉。

惟老羸之衰困、隔歲月之周旋。

耳籟鳴弗切聽、目昏眇弗明視。

鼻齟窒臭不弁、舌乾梗味不旨。

腰背偃僵荒行、膚（膚）体冷互癢（廢）寢。

悲哉老境過患、不啻僂尽手指。

何不早陷溝壑、乃格桑榆年齒。

付生平出處、師復有之否。

故旧の一叟、通謁して来り前む。

眉は縞皤にして髪を界せず、頭は臄脆として肩より低し。

榻より下りて相揖し、坐を薦め筵を指す。

跌宕の未だ定まらざるに、気を吐き言を敷く。

離索必ずしも遯からず、風馬牛及ぶべし。

惟れ老羸の衰困、歳月の周旋を隔つ。

耳は籟鳴切に聴く弗く、目は昏眇明視する弗し。

鼻は齟窒して臭弁せず、舌は乾梗して味旨からず。

腰背は偃偃にして行を荒くし、膚（膚）体は冷互にして寝を癢（癢）す。

悲しいかな老境の過患、畜に手指の儘尽するのみにあらず。

何ぞ早に溝壑に陥らずして、乃ち桑榆の年齒に格るや。

生平の出处を忖るに、師も復た之有りや否やと。

この部分は「故旧の一叟」の描写と台詞である。六句対の部分では、老境の六つの苦しみを、聴覚・視覚・嗅覚・味覚の衰えと、身体変形による歩行困難、不眠であると述べる。虎関はこれに対し続く部分で次のように説く。聴覚と視覚の順番のみ入れ替わっているのを除けば、回答の順番は整然としている。

鍊子笑曰、己子之有者、咸我之有也。

然子之憂者、咸我之喜也。

憶昔耽色、老我恤味。是所以釋粉黛也。

憶昔耽音、老我苦贖。是所以忘鄭衛也。

憶昔耽香、老我覺塞。是所以薄馨馥也。

憶昔耽味、老我慵舖。是所以疎膏腴也。

憶昔耽游、老我多懶。是所以遠朋伴也。

憶昔耽眠、老我不寐。是所以去憎思也。

茲六者取諸益不亦說乎。況不在冲孺而在耆臺乎。

又始四者益我者薄矣。終二者厚矣。

其所謂厚者不寐、故剩夜遠朋。

故賸晝晝夜之多暇也、閑思自与道違。

往彦擲璧競陰、是少壯之趨走。

今我多益饒違、幸道德之邂逅。

鍊子笑いて曰く、已に子の有する者は、咸な我の有するなり。

然れども子の憂うる者は、咸な我の喜びなり。

憶う昔色に耽る、老いて我恤味たり。是れ粉黛を釋つる所以なり。

憶う昔音に耽る、老いて我贖に苦しむ。是れ鄭衛を忘るる所以なり。

憶う昔香に耽る、老いて我塞を覺ゆ。是れ馨馥を薄んずる所以なり。

憶う昔味に耽る、老いて我舖に慵し。是れ膏腴を疎んずる所以なり。

憶う昔遊に耽る、老いて我懶多し。是れ朋伴に遠ざかる所以なり。

憶う昔眠りに耽る、老いて我寐ず。是れ憺思を去る所以なり。

茲の六者諸益を取る、亦た説ばしからずや。況や冲孺に在らずして耆耄に在るをや。

又た始めの四者は我を益すること薄し。終りの二者は厚し。

其の所謂厚き者は不寐、故に夜を剩し朋に遠ざかる。

故に昼を賸し昼夜の暇多く、閑思して自ら道と邁つ。

往彦壁を擲ちて陰を競う、是れ少壯の趨走なり。

今我益多く違を饒し、道德の邂逅を幸とす。

虎関は、聴覚・視覚・嗅覚・味覚の衰え、身体変形による歩行困難、不眠は、欲望からの解放に繋がるため、苦しみではなくむしろ喜びであると詠つ。加えて、初めの四つよりも、あとの二つの喜びはさらに大きいと言つ。なぜなら友人と会う時間や睡眠時間が減少することは、思索する時間の増大をもたらすからである。ここに、身体的な感覚よりも精神面の充実を尊ぶ思想、とりわけ「自分」というものをしっかり持つことを重要視する思想が汲み取れる。まず、視覚、聴覚、嗅覚、味覚の衰えにより、低次元の欲求が薄らいだ喜びを述べたあと、さらにひねりを加え、身体変形による歩行困難や不眠という、生活の根本に関わる苦しみすらも、自分と向き合う時間の増大に繋がるため喜びであるという。ここにも、前述の粘り強い漸増的な叙述法が活かされている。この部分に続けて、年を取らねば得られなかった荣誉や、夭折した顔淵について述べ、「若さ」と「老い」の価値は比べものにならないほど懸け離れているとも言つ。

最後に、虎関に説得された「故旧の一叟」が、感極まって「作」る部分は、賦の三部構成の「乱」(＝まとめの部分)に相当する。

叟辟席而作曰、

牽世俗之貫習、乖睿哲之典謨。

惟翻憂而為喜、即至道之要樞。

適因款晤余論、掇得咳唾宝珠。

乞貽天下之耄艾、不敢独秘畜于吾。

叟席を辟けて作りて曰く、

世俗の貫習を牽き、睿哲の典謨に乖く。

惟れ憂いを翻して喜びと為し、至道の要樞に即く。

適^{たまたま}款語の余論に因りて、咳唾の宝珠を掇^{ひろ}い得たり。

乞う天下の耄艾に貽^{おく}れ、敢えて独り吾に秘畜せざれ。

世俗の既成観念から脱却した喜びを詠うこの部分には、儒家的な語「睿哲之典謨」と仏教語「宝珠」が同等に並べられている。ここでも、儒家・仏教の思想を包括的に述べようとする虎関の態度が窺える。

六、「文竹管賦並序」

「文竹管賦並序」は、虎関の六篇の賦の中で最大の長篇である。この作品は、前漢の王褒の「洞簫賦」を代表とする詠物

の賦の系統に属する。筆管をテーマとした先行の賦作品は、虎関自身が序において触れている唐の李德裕「斑竹管賦」(『文苑英華』卷一 六「器用」の部立て所収。ただし『文苑英華』では「斑竹筆管賦」に作る)ほか、『文苑英華』卷一 六「器用」の部立てに数篇見える。竹の産地から書き始める手法は「洞簫賦」を踏まえる。

東山信戸藏岑、巨岩谷篠蕩林。

地隣北陸、氣候互陰。

積雪数丈、竹遭圧填。

瀋液漸漬、乃生奇文。

其曲者如渚、回者如塘、峙者如島、平者如浜。

波濤千尺、漣漪寸分。

遙汀迥浦、千里無垠。

其罩者如霧、縟者如霞、蒸者如烟、靄者如雲。

風景万状、朝曦夕曛。

沈寥寬郭、目送蒼旻。

東山の信戸藏の岑、岩谷に亘る篠蕩の林。

地は北陸に隣り、氣候は互陰たり。

積雪数丈、竹圧填に遭う。

瀋液漸く漬し、乃ち奇文を生ず。

其の曲れる者は渚の如く、回れる者は塘の如く、峙る者は島の如く、平なる者は浜の如し。

波濤千尺、漣漪寸分。

遙汀迥浦、千里垠無し。

其の罩おほう者は霧の如く、縹しげき者は霞の如く、蒸す者は烟の如く、靄もたる者は雲の如し。

風景万状、朝の曦ひかり夕の暉ひかり。

沈寥寛郭、日は蒼旻を送る。

信州の戸隠に生えた竹は、厳しい積雪により様々な模様を生じる。その模様を渚、塘、島、浜という形のはっきりした事物に喩えた後、霧、霞、烟、雲という、形の捉えがたい事物にも喩える。さらに、竹の模様の觀賞により発生したイメージーションは、具体的な事物の描写から、万状の風景の描写へと発展する。事物を眺め連想を続けるうちに、無限のイメージーションの世界へ飛躍していくという発想は、「盆石賦」と共通する。

この部分は、前漢の枚乗「七発」など漢代以前の賦に見られる、直喩を純粹に楽しむ叙述法の流れを受けている。虎関はこのいわば原始的な直喩を、無限のイメージーションへ没入するための手段として巧妙に利用している。

続いて、竹をめくり様々な思索を繰り広げ、信州の厳しい雪の重みにさらされた竹のみが模様を生じることを、人間が厳しい学問をして始めて「文」を身につけるようなものだとも言つ。続く部分では、竹管には「内外の文」があると詠う。

斯竹也、俗施諸器。我作筆管者文之類也。

其管之為用也、有内外之文矣。

明窓滑几、供揮灑也、

屋漏錐沙、銀鈎鍊画、

蛭厓之枯藤、峭壁之垂葛、

鸞鳳之回翔、龍蛇之蟠屈者、外文也。

岑楼寛閣、幽室独榻、采管覃思也、

奇趣雲起、偉詞泉湧、

韶濩合響、咸池交曲、

則風雅之徽音、駕象繫之高格、

典謨誓誥、索隱探蹟者、内文也。

斯の竹や、俗は諸器に施す。我筆管を作るは文の類なり。

其れ管の用為るや、内外の文有り。

明窓滑几、揮灑に供え、

屋漏錐沙、銀鈎鍊画、

蛭厓の枯藤、峭壁の垂葛、

鸞鳳の回翔し、龍蛇の蟠屈するは、外文なり。

岑楼寛郭、幽室独榻、管を采り思いを覃^⑥ぶるや、

奇趣雲のごとく起き、偉詞泉のごとく湧き、

韶濩響を合わせ、咸池曲を交え、

風雅の徽音に則り、象繫の高格に駕し、

典謨誓誥、隠を索り蹟を探るは、内文なり。

竹を筆管に作れば、竹に「内文」と「外文」とが生まれる。「外文」とは、筆を揮って現れる美しい書体の数々である。「内文」とは、筆を握って思いをめぐらす時に心中に現れるインスピレーションや知の世界である。「文竹」の「文」のイメージを広げるために、「外文」「内文」という概念を作り出した発想は奇抜である。

ある物からイマジネーションが広がることを述べる点は「洞簫賦」以来の詠物賦の手法を踏襲している。しかし、「洞簫賦」では洞簫の音色が引き金となって、場面が次々と頭に浮かぶことで悲しさや楽しさをパセティックに表現していた。これに対し、「文竹管賦」は竹から広がるイメージを華麗な筆致で描くものの、その楽しさはあくまで理知的である。

復斯竹也、不特文其質也、

又能令所依之者文焉、文竹之称可謂協実乎。

不器之器多変態乎。

易有天文之人文而無地文焉。

我言斯竹者地文也、蓋生地而有文也。

又夫斯竹也、天文也、其文自然而非造作也。

又人文也、人采管而文思発也。

嗚呼兼三才之文者、其唯斯竹乎。

復た斯の竹や、特り其の質を文るのみならず、

又た能く依る所の者をして文ならしむ、文竹の称実に協つと謂うべし。
不器の器 変態多し。

易に天文 人文有りて地文無し。

我斯の竹を地文と言わん、蓋し地に生じて文有ればなり。

又た夫れ斯の竹や、天文なり、其の文自然にして造作に非ざればなり。

又た人文なり、人管を采れば文思発すればなり。

嗚呼 三才の文を兼ねる者は、其れ唯だ斯の竹のみか。

「文竹」の「文」のイメージを広げるために、『易経』に見える中国の伝統的概念「天文」「人文」のほかに、「地文」という概念を作り出し、それらを「三才之文」と名付ける発想は奇抜である。また、文竹の様子が天然のものであることの称揚は、「緑蔭亭賦」における自然の摂理の称揚に通じる。

最後に、短い「歌」で、竹と人は苦難に耐えて文をなす点において共通すると述べる。

竹之質兮人之質、竹之文兮人之文。

竹不雪兮不文、人不学兮不文。

君子之竹兮君子之人、人肖竹兮竹肖人。

竹の質や人の質、竹の文や人の文。

竹雪ふらざれば文ならず、人学ばざれば文ならず。

君子の竹よ君子の人よ、人竹に肖たり竹人に肖たり。

竹と人とが似通うと詠うこの部分には、儒仏両方の考えが汲み取れる。中国では「竹」が高い精神性の象徴とされることは言うまでもない。この部分からは、竹に鑑みて人格を陶冶すべしとの教訓を読み取ることができる。いつぱう、苦難に耐えて成長するとき人も竹も一如であるとの発想を読み取ることもできる。高い精神性を追求する儒家的な発想と、万物に區別はないと説く仏教的な思想の両方が「雪中の竹」という美しいイメージを背景に展開され、思索と抒情の高次の結びつきを作り出している。

おわりに

虎関の六篇の賦は、いずれもテーマが明快であり、条理は整然としている。仏教的な発想を随所に鏤めているものの、宗教心や仏教の知識が乏しい読者にも楽しめる文学作品となっている。内容の醍醐味の一つは世俗の既成観念を根本から覆すような物の見方の転換である。この物の見方の転換がもたらす痛快さは、仏教に興味がない読者をも仏教に興味を持たせるに足る。現世の迷いや苦しみから読者を解放しようとする試みる点には、禅文学としての性格が色濃く表れている。五山文学では、禅の悟りの境地は詩でも表現されるけれども、詩の場合には短い語句によって端的に示されているものが、賦においては議論や粘り強い説得の形式によって、宗教心のない読者にもより明確に理解できるように書かれている。この点において、虎関が賦という形式を選択したことは成功を納めていると考えられる。

表現について見ると、対句、体物（＝客観的描写）、鋪陳、諧謔といった賦の属性をテーマに合わせて巧みに使いこなしている。また、叙述法について言うと、戦国時代の賦の問答体、漢賦の壮大華麗な筆致、魏晉賦の抒情、宋賦の論理といっ

た、中国の歴代の賦の叙述法の全てを消化し、場面に合わせて巧みに使いこなしている。

虎関の六篇の賦は内容も叙述法もバラエティに富むため、特徴を一言でまとめるのは難しいけれども、敢えて次の三点を挙げたい。一つ目は、物の見方の大胆な転換。二つ目は、漸増的で粘り強い論理の展開。三つ目は、仏、儒、老荘の思想を包括的に述べること。たしかに北村が指摘していたように、虎関の論理に牽強付会な面があるのは否定できないのだけれども、様々な角度から粘り強く説く論法はその瑕疵をもカバーしうる迫力がある。

虎関以外の五山僧も賦や楚辞の系統を受容した作品を残している。中巖圓月の賦は楚辞の「離騷」「涉江」の悲憤慷慨の要素や北斉の顔之推「観我生賦」の自己観照の要素を継承するものであり、龍泉令淬の賦は梁の劉峻「広絶交論」の議論の影響を窺わせるもので、それぞれ特色があるのだけれども、虎関は中国の歴代の賦作品を広範に踏襲している点で、五山の賦家の中でも突出した存在であると認めることができる。

本稿は、虎関の賦の内容を紹介し、内容および叙述法の特徴について述べてきた。虎関の賦の押韻法、先行作品との比較、他の五山僧の辞賦作品との比較など、論ずべき問題は多く残っているけれども、これらの問題については今後、稿を改めて個別に論じていきたい。

〔註〕

- (1) 中国の文体についての先行研究は数多いけれども、本稿では主に林田慎之助『中国中世文学評論史』（創文社、一九七九年）、興膳宏『中国の文学理論』（筑摩書房、一九八八年）、褚斌傑『中国古代文体概論（増訂本）』（北京大学出版社、一九九一年）を参考にした。
- (2) 『平安朝日本漢文学史の研究 増訂版』明治書院、一九六四年、一三六―一三七頁。
- (3) 鈴木虎雄『賦史大要』（富山房、一九三六年）四二―五三頁。
- (4) 賦についての先行研究は数多いけれども、本稿では主に注3前掲鈴木虎雄『賦史大要』、馬積高『賦史』（上海古籍出版社、一九八七年刊、一九九八年第二版）、陳慶元『賦：時代投影与体制演变』（广西師範大学出版社、二〇〇一年）を参考にした。
- (5) 虎関師鍊の別集『濟北集』のほか、中巖圓月の別集『東海一瀾集』、龍泉令淬の別集『松山集』に賦作品が見られる。また、夢巖祖応

の別集『皐霖集』、義堂周信の別集『空華集』に楚辞の名を冠した辞賦作品が見られる。

(6) 虎関の中国の文学理論の理解については蔭木英雄『五山詩史の研究』(笠間書院、一九七七年)一四一―一五七頁に詳しい。

(7) 虎関の音韻研究書『聚分韻略』についての研究は奥村三雄『聚分韻略の研究』(風間書房、一九七三)がある。

(8) 注6前掲『五山詩史の研究』一四三頁。

(9) 富山房、一九四一年。

(10) 原文「説老職」に作る。

(11) 『済北集』は国立公文書館(内閣文庫)所蔵、慶安三年刊本(旧蔵者、和学講談所)をテキストとした。

(12) 同じく盆石をテーマとしたものに、龍泉令淬(???)一三六五)の「盆石詩序」がある。中川徳之助は『日本中世禅林文学論攷』(清文堂、一九九九年)二二四―二二五頁で龍泉令淬の「盆石詩序」を取り上げ「一拳石、盈尺水に山水の佳景極観を観すべきことを説いている」と述べている。発想の面で虎関の「盆石賦」との類似性が指摘できる。